

【書評】

佐藤 光・中澤信彦 編『保守的自由主義の可能性 ——知性史からのアプローチ』

ナカニシヤ出版, 2015年, 288頁

「保守主義」という言葉は長らく単なる批判や罵倒のための述語として使われることが多かった。例えばハイエクなど多分にそうした要素を含むと思われる多くの知識人や思想家たちも、あえてそう見なされることを拒否する努力を行ってきたし、今なおそうした風潮は残っている。しかし20世紀の独断的な合理主義による急進的な社会改革（設計）の思想が無残な結末をもたらしたこと、それに対する反発あるいは一種の解毒剤として登場したポストモダニズムも過度の相対主義の袋小路に陥ったこと、さらには賛否は別として生活に絶えざる変化をもたらすグローバリズムへの危機感の台頭、それに伴う文明間の衝突といった背景が、日常や慣習、中間組織の意義をあらためて再確認しそこに社会の存続と発展の可能性を見出す穏健な「保守主義」への期待が高まっている理由であろう。思想史研究としても特に近年のバーク研究の隆盛・発展には目を見張るものがある。そうした流れの中で、本書は思想史研究の一つとして様々な保守主義者の議論を読み解きつつ、現代社会が抱える様々な問題について思い切った解答を提示しようとしている点で非常に画期的である。

本書が主張する「保守的自由主義」の特徴は、序章（佐藤光）における、盲目的な「進歩主義」や「多数派の専制」としての「民主主義」への懐疑、さらには過去、現在、未来

を貫徹し「同時存在する時間」意識、「善」に関する共通感覚」に基づく「漸進的進歩」あるいは「保守的改革」といった性格において明確であり、続く8つの章から構成されている。

第1章「エドマンド・バーク」（中澤信彦）は、共同体の解体を意図するルソーの道徳論との比較の下で、バークの市場社会擁護が家族的共同体に基づく習俗や自己規制という前提に立つことを論じつつ、その応用として「現世代中心主義」や単純な選択の自由概念に基づく「学校選択制」への批判や地域社会への義務という現代的意義を強調する。

第2章「ジョサイア・タッカー」（松本哲人）は、タッカーの経済論における宗教の役割を強調し、やはりそれが放縦に対する規制概念として機能していることを示すとともに、現代の公教育制度における自由か強制かという二項対立を批判し、学校教育における権力的要素の必要性や意義を指摘する。

第3章「T・R・マルサス」（中澤信彦）は、保守主義者としてのマルサス像を強調し、国内経済において農業部門の成長が工業部門発展の前提となりつつ双方が両立する農工バランス論の意義について論じる。さらにそれが単なる保護貿易論ではなく、現代のTPP問題を例にとり農工バランスの観点からその賛成論となる可能性を提示している点は興味深い。

第4章「マイケル・ポランニー」(佐藤光)は、その「超越的価値への献身」、暗黙知理論の持つ「伝統主義」的性格、「漸進的な改革」、ユートピア的道德の主唱者たちがかえって社会を崩壊させる「道徳的反転」への批判といった特徴を指摘した上で、自由社会を守るためにも「宗教という宿命を正しく背負うこと」ならびに「絶対的真理」の存在を信頼する構えこそが求められているとする。

第5章「マイケル・オークショット」(中西真生)は、理性の「完全性」や「画一性」、あるいは「技術知」としての側面のみを強調する「合理主義」に対する批判としてオークショットにおける「実践知」の意義について論じるとともに、現代政治における世襲制への全面的批判の背後にある「合理主義」的思考態度の問題点も合わせて考察する。

第6章「新渡戸稲造」(山本慎平)は、新渡戸の多様な政治・思想活動におけるマルクス主義や軍国主義への抵抗、パークからの影響、デモクラシーが多数の専制へと凋落することへの批判、状況や立場に合わせた現実的な「レトリック」の重要性を指摘し、大戦を防げなかった彼の限界をも含めてその再検討の必要性を主張する。

前章と合わせて第7章「柳田国男」(佐藤光)は、日本思想史における軍国主義はもちろん単なる復古主義とも区別される保守的「リベラル」の可能性を追求する。柳田の保守主義を観念論に傾きがちな保田興重郎の日本浪漫派とは異なる一つの「社会科学」と捉え、「過去、現在、未来に永続する永遠の価値の实在」あるいは「家」とともに継承された「常なるもの」という保守的自由主義の根幹にある時間意識の重要性を主張する。

補章「ジョン・グレイの自由主義的ホブズ解釈」(北西正人)は、現代イギリスの政治哲学者グレイのホブズ解釈を基に、上記の保守的自由主義者たちとは対照的な平和共

存の手段としての「暫定協定」の意義を示すとともに、多様な利害や価値観の中で崩壊の危機に瀕する現代における国際平和実現の可能性を探っている。

以上、本書においては、地域社会への参加義務の強調、公教育の権力性や政治家の世襲、継承されたものとしての宗教や「家」制度の擁護など反時代的とも思われる主張もあえて前面に置かれる一方で、全体としては排外主義とは徹底して距離を置き「寛容」を旨とする「リベラル」な立場を歴史意識の中で擁護しようとする立場が貫かれている。

一方「保守的自由主義」には本書以外の様々な思想家たちも当然含まれると考えられ、当概念による新たなマッピングや視点の提示も今後期待される興味深い作業であるが、歴史意識に基づくバランス感覚を旨とする便宜主義の擁護という本書の最大の特徴を考えると、経済論としてもおそらく中心となるのは、新古典派経済学の視点で解釈される以前のオリジナルなケインズ思想であろう。

その上で、評者の疑問点は二つある。第一に、著者たちが端々で強調する「リベラル」な態度には共感を覚えるものの、その便宜主義による正当化は必ずしも成功していないように感じられる。社会的・歴史的な文脈を重視した便宜主義は肯定的に捉えれば融通無碍であるが、反面、後付けの解釈が無限に可能かつ対立するどちらの結論も擁護できてしまうように思われ、それが各章の現代的意義の主張に今一步説得力を欠く要因にもなっている。第二に、本書の議論においては既存の共同体や成員の同質性が前提とされてしまっているように思われるが、むしろ現代社会において問題となっているのは、好むと好まざるに関わらず既存の共同体から切り離され共通の「物語」を失った人々の存在ではないだろうか。

ただ保守主義の優位性とは、直接的な政治

的方策の当否よりもむしろ、第4章でも指摘されている科学者集団の文脈依存性のような党派を問わず暗黙のうちに共有しているメタ的思考様式が存在の強調とそれを意識することによる漸進的な改革にあるだろう。その意

味でも新たな社会的包摂の可能性を含め、改めて共同体のあり方を問い直す保守主義についての議論が深まることは重要であり、本書はその大きな一歩である。

(太子堂正称：東洋大学)